

## A1時代を生き抜くために必要な力を育む

私は発達心理学や認知科学などを専門にしていますが、乳幼児から児童期にかけては、認知発達が劇的に変化する重要な時期になります。この時期の経験の豊かさが「想像力」へと結びついていくのです。この観点から、「読書」「手伝い」「外遊び」について考えていきましょう。

さて、その前に「想像力」とはなんでしょうか。ドイツ強制収容所の生活を生き延びた精神科医ヴィクトール・フランクルは、その体験記で「人はパンのみにて生きるのではない。想像力によって生きる力が与えられる」という名言を残しています。つまり、「想像力」とは「生きる力」に直結する力だということです。

では次に、「想像力」が子供の脳に芽生えるのはいつかというところ、生後10カ月ごろです。脳の海馬（思考を司るの、視覚や嗅覚といった「五感」になります。そして、経験が豊かであるほど、想像力も豊かになるのです。読書、手伝い、外遊びはすべてこの「経験」に当てはまるといえるでしょう。

自発的な「想像」を育む  
読書・手伝い・外遊び

次に、実際にそれぞれがどのような影響を子供にもたらすのか、ひとつずつ見ていきましょう。

まずは、読み聞かせも含めた読書。断片的な経験から何かを想像しようと



「遊誘材」の宝庫なのが外遊び

部分」と扁桃体（感情を司る部分）にネットワークが作られ、子供の頭の中に「イメージ」、つまり「精神世界」が誕生します。これによって、扁桃体（感情）が最適な状態になるほど、子どもが覚えられようようになるのです。私はこの最初の認知発達を「第一次認知革命」と呼んでいます。

その後、5歳後半ごろになると言葉による思考活動が始まる「第二次認知革命」、さらに9〜10歳ごろからは、脳の最高司令官ともいえる前頭連合野が脳、体、心全体をコントロールするようになる「第三次認知革命」が起こってくるのです。

子供の脳というのはこれだけドラマティックに発達するわけですから、この時期、保育者の関わり方が子供の脳や想像力（生きる力）に大きな影響を与えることは、おわかりいただけるのですね。子供が1万人以上の子供たちを対象に行った実験で、あるイラストを見てお話を作ってもらおうというものがありますが、絵本の読み聞かせ体験を十分に受けている子供はまさにこの「創造」活動が盛んで、お話を作るのが上手でした。

具体的には、談話文法の獲得が早く、起承転結も上手。また、「昔々」といった常套句の演出技法も見事に取り入れています。それだけ言語技術が高いということですね。

実際に、絵本体験が豊富で語彙も豊かな子は、OECDが測るPISSA型学力（学校で習ったことではなく、知識や経験を生かして実生活のさまざまな場面で直面する課題について、自分



内田伸子先生

お茶の水女子大学名誉教授。発達心理学、言語心理学、認知科学、保育学のエキスパート。NHK「おかあさんといっしょ」の番組開発など多方面で活躍。'19年に文化庁長官表彰受賞。

ではないでしょうか。

この前提を踏まえ、改めて「想像力」を養うためには何が必要かというところ、その答えは「経験」です。

経験とは「五官」を使った「直接的な体験」と、絵本の読み聞かせや人から聞いた話などから得られる「疑似体験」のふたつを指します。ちなみに「五官」とは、目、耳、鼻、皮膚、手足といった感覚器官を指しますが、この五官を通じた刺激が、頭の中に信号として伝わると、皆さんもよくご存じで積極的に考える能力）が高いことも明らかになっています。

さらに、いわゆる「難関校」を突破した子供は小学校就学前に絵本の読み聞かせ習慣があり、読書好きだったという傾向もあるほどです。

つづいて、順番は前後しますが「外遊び」について。体を動かすだけなら屋内でもできますが、外には草、砂、石ころなど「遊誘材」がたくさんあります。遊びの多様性が生まれ、自生的な力が養われるのです。

子供はよく縁石や塀の上を得意そうに歩いたりするものですが、よちよち歩きの頃はそんなことはしませんよね。自由に歩けるようになった子が、より難しいところに挑戦することで、自信を確認するように遊んでいるのです。自発的な遊び体験を積み重ねることで、子供は成長していきます。

こうした自由遊びの時間が長い保育

「想像力」こそが「生きる力」になるのです

## 「遊び」を通して成長するのが子供

園の子供のほうが、語彙力が高いことも明らかになっています。日韓中越豪で行った調査でも、子供の数が多くて管理教育にならざるを得ない中国を除くすべての国で同じ結果でしたので、子供の自発性と自由を重んじることが、結果的に発達を促すことになるのではないかでしょう。

最後に「手伝い」ですが、とくに料理を作ることは子供にとって「遊び」にほかなりません。子供は「第一次認知革命」を境に「ごっこ遊び」をするようになりませんが、台所に立つことは究極の「ごっこ遊び」です。台所にあるお玉や木べら、パンを捏ねることやレタスをちぎること、すべてが遊びになるのです。

そして、「料理」を通して、科学や美術など、さまざまな知識を吸収することもできるのです。「食育」はまさに総合教育。教えるというよりはシン

ブルに「一緒に暮らす」というつもりで、料理を始めお掃除や洗濯など、あらゆる家事と一緒に楽しく行っていくべき。

なお、指先が器用な子供もPISA型学力が高いことがわかっています。手指をよく使うと、この運動野の近くにある、脳のワーキングメモリーが活性化するので。

### 子供たちに必要なのは「学習」ではなく「楽習」

ただし、すべてにおいて保育者が注ぎたいことは、子供の自発性と自由さを重んじることです。子供に考える余地を与え、子供に合わせて柔軟に対応した親の子供ほど、難関校突破組が多かったことも明らかになっています。具体的には「ほめる、はげます、ひろげる」の3つのHを意識して接することが大切だと思います。

反対に、押しつけ型の教育やしつけは逆効果。教え込みやドリル学習では他人の言語を理解する働きを持つ、脳のウェルニッケ野という部分が萎縮することもわかっていますし、感情が快適でないと海馬はものを覚えられないというのは冒頭の通りです。

子供は「遊び」を通して成長します。頭の良さはIQ（学力）認知スキル）で示されることが多いのですが、それだけでは社会生活は送れません。他者とききあう力、感情を管理する力、目標を達成する能力といった「非認知スキル」も大切です。「遊び」が学力に関与することはすでにお話しましたが、実はこの非認知スキルも、遊びを通して育つのです。子供たちに「学習」ではなく、遊びを通して「楽習」をさせてあげる環境を用意してほしいと願います。

IQは、いずれAIに凌駕されることでしょう。だからこそ、これからの時代を「生きる力」とは、まさにAIではたどり着けない「自発的な想像力」になってくるのです。

## 内田先生の研究成果をもっと知りたい人のためのBOOK GUIDE

### 子育てに「もう遅い」はありません

(富士房インターナショナル/本体1200円+税)



人見知り、ケンカ、だだこねといったママの心配ごとをスッキリ解消。子育ての「？」に答えてくれる。子供の発達に合わせてあせらず見守ることの大切さに気づかせてくれる一冊。

### 子どもの見ている世界 誕生から6歳までの「子育て・親育ち」

(春秋社/本体1600円+税)



身体・心・言葉・個性・知能…。深く多様な子供の認知世界を紹介しながら、乳幼児期の成長発達にもなう育児の悩みや疑問に内田先生が答えてくれる。子供の視点を共有することの大切さが伝わるはず。

### 発達の心理 一ことばの獲得と学び

(サイエンス社/本体2100円+税)



子供の言語や認知の発達を、認知科学の成果をふまえて解説した一冊。認知のメカニズム、心の初期構造や情報処理のメカニズム、内的表象の変化などが幅広く学べる内容。関連する図書案内も収録。

### 世界の子育て格差 子どもの貧困は超えられるか

(金子書房/本体2400円+税)



日本・中国・韓国といった東アジア諸国から途上国まで、多様な国の子育てや発達をめぐる調査結果を報告。幼児期の親のかかわりと学力の関連、母子保健医療、バイリンガル教育といったテーマを扱う。

### AIに負けない子育て ~ことばは子どもの未来を拓く~

(ジアース教育新社/本体1800円+税)



「AIに負けない力」をつけるには、どんな子育てをすればいいの？ 実際に教育相談の場に寄せられた親からの悩みや質問に、内田先生が科学的理論に基づいたデータを提示しながらズバリ回答する。